

フリードリッヒ・メルヒオール・グリムの『文芸通信』におけるノヴェール

森 立子

①18世紀ヨーロッパにおける「文芸通信」

「文芸通信」という語は、一般的には、「文学的内容を含んだ書簡集、あるいは作家・文学者の間で交わされる書簡集」を指すものとして用いられる。しかし18世紀ヨーロッパにおける「文芸通信」と言った場合には、より具体的なものが想定されることになる。すなわち、ヨーロッパ各地の啓蒙君主に、フランスの文化や思想を伝えるために執筆された文書が「文芸通信」の名で呼ばれるのである。

②グリムの『文芸通信』

こういった18世紀の「文芸通信」の中でも、当時から今日に至るまで、最もよく知られてきているのがグリム Friedrich Melchior Grimm の『文芸通信』である。元々レナル神父によって開始され、その6年後の1753年にグリムを主幹として新たに出発したこの文芸誌は、北ヨーロッパ各地に定期購読者を得ながら発展、1813年まで存続することとなる（ただし、1773年3月からは、グリムに代わってマイスターが主幹を務めている）。

2週間に1回（後に月1回）発行された『文芸通信』には、文芸評論、舞台評、旅行記、文芸界のニュースなどが盛り込まれている。その中でとりわけ注目すべきは、こういった記事の中に、舞踊に関する記事が少なからず含まれているという点である。それは、当時の「文芸共和国」にあって、舞踊もまた人々の尽きせぬ興味の対象となり得ていたことを如実に示すものである。

③『舞踊とバレエについての手紙』

ところで、『文芸通信』とちょうど同じ時期に振付家・舞踊理論家として活動を展開していたノヴェールも、数回にわたってその誌上に登場している。

ノヴェールに関する最初の記事は、1761年8月15日号に現れる。これは、1759年末にリヨンとシュトゥットガルトで出版された『舞踊とバレエについての手紙』（以下『手紙』と略記）に関する書評である。

この記事は(1)『手紙』の全般的評価、(2)『手紙』の要約、(3)グリムの「舞踊劇」観、の3つの柱から構成されているが、ここでは特に(1)と(3)について確認しておきたい。

全般的評価

この記事におけるグリムの論調は、基本的に、『手紙』に対して好意的なものとなっている。特に、グリムがカユザックの著作とノヴェールのそれとを比較しつつ、後者をより優れたものとして評価している点は興味深い。（「この著作 [『手紙』] は……1754年に出版され、それなりの成功を収めたカユザック氏の『舞踊概論』よりも、あらゆる点において優っています。」）

グリムの「舞踊劇」観

ただし、同じ記事の中に、『手紙』の中には無い議論が加えられている点にも注意しておく必要がある。すなわち、「『手紙』を補完する」と称して、グリムは、舞踊作品の構成に関する次のような議論を展開しているのである（以下要約）。

例えば、オペラにおいて最初から最後まで歌ばかりが続けば、それは耐えがたいものとなる。従って、オペラのアリアとアリアの間には、レチタティーヴォをさはまなければならない。これと同様に、舞踊劇においてもレチタティーヴォとアリアの区別は重要である。ところで、舞踊におけるレチタティーヴォとアリアとは何か。それは「歩き」（ただしそれは通常の歩行とは異なり、より律動的なものである）と「舞踊」である。舞踊劇のあるべき姿とは、「歩き」の要所要所（＝情念が高まった時点）に「舞踊」が挿入されたものである。

④ノヴェールに関するその他の記事

その他、『文芸通信』には、ノヴェールの舞踊作品に関する記事がいくつか見出される。これらは、1776年から1780年にかけて書かれたもので、ノヴェールのパリ時代（1776～1781）の振付家としての活動を伝える貴重な資料の一つとなっている。

⑤『文芸通信』とノヴェール

1761年から1780年にかけて、『文芸通信』はドイツ各地、スウェーデン、ロシアの君主をその定期購読者としていたことが知られている。つまり、『文芸通信』は、ヨーロッパの有力者たちへの「情報発信源」として機能していたわけである。とするならば、ここにノヴェールに関する記事が含まれているという事実を、我々は軽視するわけにはいかないだろう。ノヴェールの名がヨーロッパ中に知られるようになったその事実の背後に、『文芸通信』という存在もあったことを、我々は忘れてはならないのではあるまいか。

参考文献（抄）：*Correspondance littéraire par Grimm, etc.* (ed. Tournoux, Paris, 1877-1882, 16vols.)